

片山由美子 選

ついでと落ちて 朴の葉裏返る

枚方市 門川 清秀

△評▽大きな葉が落ちてくる様子をスローモーションで見せているような面白さがある。最後の「裏返る」で場面が決まった。

夕闇の迫つて来たり大根時

神戸市 常澤 椒子

△評▽ダイコンの種をまくのは秋も深まってから。日が短くなり、せかさされる思いが強いだろう。

貴船川秋のほたるのふたつ三つ

川越市 石田浩二郎

とんぼの飛び空我の目の高さ

狭山市 小俣 敦美

葉陰より滲むむらさき葛の花

八街市 山本 淑夫

新涼や湧き水砂を噴き上げて

飯塚市 倉田 幸男

法師蟬これが最後の声かとも

河内長野市 守口 幸子

寄進者の名入りの柄杓つくつくし

臼杵市 村上 玲子

きりぎりす鳴くや深まる庭の闇

羽生市 今成 公江

花カンナ夕日の色を重ねけり

加古川市 中村 立身

小川 軽舟 選

秋雲や紺の暖簾のカステラ屋

吹田市 三島あきこ

△評▽澄んだ青空に浮かぶ白い雲、紺ののれん、そしてカステラの黄金色も連想されて、秋らしい色彩の豊かさを感じる。

夏木立ひとかたまりの影落す

坂戸市 戸田 九作

△評▽炎天下に寄り合うように立つ木立の濃い影が「ひとかたまり」で表現されている。

茄子育つ灯台守のプランター

富士宮市 渡邊 春生

竜淵に潜む夜更けのカーラシオ

横浜市 前島 康樹

製油所を囲む緑地や虫の闇

多賀城市 矢崎 英敏

西向きの単身寮や秋簾

名古屋市 山内 基成

竜胆に星潤む夜の山気がな

東京 木幡 忠文

七夕や短冊で知る子の願ひ

鴨川市 富川 康雄

家々の戸口明るき星月夜

前橋市 松本 潤

せめぎあふ力抜きをり雲は秋

豊橋市 岡野寛十郎

西村 和子 選

亡き妻がそこに来てる夜長かな

湖西市 宮司 孝男

△評▽長年住み慣れた家だろう。静かな秋の夜は、すでに亡き人もそこに居るようだ。残された者の季節の美感と言えよう。

引き波の砂音高く冷夏なり

札幌市 村上 紀夫

△評▽砂といっても粗い砂だろう。夏なのに寒々しい音が、人の心を逆なでするようだ。

この辺り確か駄菓子屋秋夕焼

平塚市 森本富美子

空港の何処か閃光野分中

千葉市 島山さとし

地芝居や起きて幕引く斬られ役

東京 吉田かずや

少年の逆立ち歩き秋の風

青森市 小山内豊彦

白雲の湧き立つ方へ秋茜

長浜市 中島 正則

ポン菓子屋もう来る頃よ秋日和

下関市 佐藤よし子

大原の山裾暗し藤袴

京都市 市川 俊枝

ほんのりと残る記憶や地蔵盆

みやま市 紙田 幻草

井上 康明 選

海揺れて地球も揺れていわし雲

京都市 市川 俊枝

△評▽海と地球が揺れることよって、いわし雲の模様が生まれるかのような。水平線へ広がる様をダイナミックに捉えている。

夕映えの秋空に浮く飛行船

相模原市 はやし 央

△評▽秋夕映えの空の飛行船には夢がある。空を漂い、さまざまな境界を越え物語が始まるだろう。

山山の声雲の声青風

唐津市 梶山 守

青亡少年が又笛を吹く

久留米市 持地 恒美

法師蟬終ひに寿寿と鳴いて去る

大分市 久富 豊治

休暇明校舎の廊下果てしなき

土浦市 今泉 準一

露けしや起伏の果てに牛二頭

甲府市 清水 輝子

補陀落へ急ぐ秋海棠の坂

越谷市 安居院半樹

鱗雲思ひを強く持たねはと

久喜市 利根川輝紀

ローレライの歌船上に秋日和

伊賀市 福沢 義男

ことばの五感

シーツを被って 川野里子

沈黙は剥きたしなれば声いだし声のうしろに隠るわたし 渡辺松男
空き家になった美家の夜。突然何かの影が飛び込んできた。とっさに蛾だと思
った。私は蛾が怖い。理由などない。と
にかくダメなのだ。恐怖ほど人間を原始
に突きもどすものはない。とっさに手近
にあったシーツを被る。可能な限り体を
小さく丸め、全身を耳にする。影はバタ
バタと天井にぶつかり、壁にぶつかる。
白布の薄明かりのなかで目を閉じると、
かつて見た蛾の羽の目玉模様がじつとこ
ちちを見ている。汗が滲む。とにかくこ
の部屋から脱出したい。
心を集めて蛾の心理を思ってみるが、
気まぐれにあっちこちとぶつかり続け
る蛾の気持ちなど分からない。そして突
然羽音が止んだ。どこかに行ったのか、
あるいは壁に貼りついているのか。蛾の
位置が分からない。すぐそばに貼りつい
ているかもしれない。静寂が続く。怖さ
は頂点に達し、私は声を出す。「おーい
!」。まるで深山で迷子になったような
自分の叫び声に驚く。静寂。
だんだん体が痛くなってくる。耐えか
ねてシーツを被ったままそうそうと移動
を開始する。この瞬間私はいったい何者
なのか。恐怖以外の感情の全てを失い、
聴覚だけを尖らせている感情の化け物。
一枚の布だけを頼りに体育座りのまま少
しずつ進み、隣の部屋に着く。扉を閉め
る。シーツを払いのける。私が私に戻る。
扉の向こうはまだ静かだ。しかしあの
影は本当に蛾なのか? 私は確とは見て
いないのだった。影が私の気配に耳を澄
ませている。(かわの・さとこ「歌人」)